

共感 (empathy) の比較認知科学的・比較認知発達科学的研究に向けた
枠組みの構築

Construct a framework of Empathy for comparative cognitive science and
comparative cognitive developmental science

研究代表者 服部 裕子 (D3)

教員 藤田 和生

研究分担者 森本 陽 (D1)・高岡 祥子(M2)・瀧本 彩加(M1)・鹿子木 康弘
(M1)・劉 波(M1)

〔研究目的〕

ヒトの社会的場面、特に協力や利他的行動を行う場面において、「共感」(empathy)は非常に大きな役割を果たしている。ヒトにおいては神経科学、発達心理学などの分野で共感は古くから研究されており、ヒト以外の動物にかんしてもサルやラットを中心に生理的指標を調べた研究がいくつか行われている。しかしながら、それぞれの分野が独自の枠組みで研究を進めており、ヒトおよびヒト以外の動物における共感能力を比較研究するには、こうした個々の分野の研究を相互に位置づけ、統合する枠組みが必要である。本研究の目的は、ヒトおよびヒト以外の動物で行われている共感にかんする研究を多様な分野にわたって概観し1つの枠組みのなかに位置づけることにより、ヒトとヒト以外の動物の比較認知科学的・比較認知発達科学的研究にむけた共感にかんする枠組みを構築することにある。

〔研究経過〕

毎回セミナー形式で、主に Preston & de Waal (2002)、Iacoboni & Dapretto (2006)などをテキストにして神経科学、発達心理学、認知科学、動物行動学など多彩な分野における他者への共感にかんする最新の文献を概観し、グループのメンバーおよびセミナーの参加者とともに議論を行った。

〔研究成果〕

本稿では、議論の題材となったテキスト(Preston & de Waal, 2002)およびそこで行われた

議論の要約を以下に記す。

(1) 題材となったテキストの要約

共感という現象の正確な性質については同意が得られていないものの、情動的、認知的、条件付け的な見方があり、種によってこれらがさまざまな度合いで働いている。究極的なメカニズムと至近的なメカニズムの記述によってこれらの見方を統合することができる。直接的には、Object の状態を Subject が知覚するとそれと一致した Subject の表象が活性化され、それによって身体的、自動的な応答が活性化される。集団で生活する動物の繁殖成功にとって重要な行動（e.g., 警報、社会的促進、情動を自分のことのように感じる、母と子の応答性、競合者と捕食者モデル化する）をこのメカニズムが支えている。Perception Action Model(PAM)はどのように表象が経験とともに変化するかを説明するとともに、これまで知られていた実践的な主要な効果(類似性、親密性、過去の経験、明確な教示、顕著性などの効果)を説明することができる。このモデルは共感におけるさまざまな障害を予測することもできる。PAM と前頭前野機能の間の相互作用によって種や年齢集団によって異なったレベルの共感を説明することも可能である。この見方は包括的適応度や互惠的利他主義を超えて共感を進化的に理解することを前進させ、個体間、種間、発達段階にわたる異なる共感のレベルを説明することができる。

(2) 得られた議論の要約

ヒト以外の動物における共感のメカニズムを、究極的な視点ではなく至近的視点からとらえた点は新しく、行動実験を行う際に有用な考えであると考えられる。また、ヒトの発達研究およびヒト以外の動物における行動実験との対応も非常に興味深いものであった。しかしながら、筆者らが主張する Perception Action Model に関して、神経科学的な研究科らの統合的な実証が不完全であり、そのメカニズムを支える直接的な研究が必要であると思われる。

引用文献

Preston SD & de Waal FBM (2002), Empathy: Its ultimate and proximate bases, *Behavioral and Brain Sciences*, 25, 1-72.